

その行動は いずれ自分に返ってくる



ご検討ください！ ジェネリックへの切り替え

ジェネリック医薬品には新薬開発コストが含まれていないため、先発医薬品に比べると安価です。それでいて先発医薬品と同じ有効成分を同じ量含んでいるため、効果は基本的に変わりません。

“ジェネリックにしない、という選択は、本来不要なコストをあえてかけている行動ともいえます。その行動は、さらに将来の自分に負担増となって返ってくる可能性もあります。理由もなく“なんとなく、であれば切り替えをご検討ください。

将来の負担増①

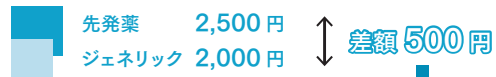
積み重なると大きな差額に…

ジェネリックが安価とはいっても、窓口負担は3割（年齢・所得によって2割）のため、1カ月の差額はそれほど大きなものではありません。しかし、生活習慣病など長期間のみ続けることが必要な薬の場合は、積み重なると大きな差額になります。

今すぐの差額だけでなく、将来の差額まで考えてから検討するようにしましょう。

差額のイメージ

1カ月



1年後（12カ月）



積み重なると大きな差額に！

将来の負担増②

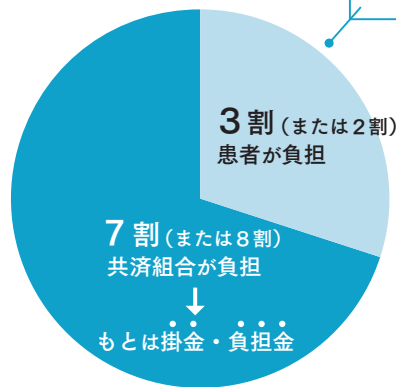
共済組合の支出にも影響します

医療機関窓口の自己負担割合は3割ですが、残りの7割は共済組合が負担しています。共済組合が負担するといっても、もとは組合員と所属所に納めていただく掛金・負担金です。

ただでさえ高齢化や新しい医薬品の登場により、薬剤費をはじめとする医療費は増加傾向にあります。その医療費を抑制するため、国を挙げてジェネリックの普及が求められているわけです。

掛金・負担金で賄えなくなった場合、財源率を引き上げることになるかもしれません。そうなったら、皆さんの支出も増えてしまいます。

薬剤費の負担割合

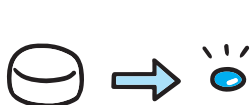


多くの自治体では、子どもの医療費助成を行っています。医療費助成の対象は窓口自己負担分のみです。医療費助成があっても、共済組合の負担は残ります。

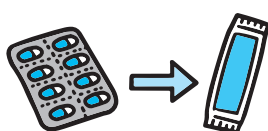


ジェネリックを選ぶことで、のみやすくなることもあります

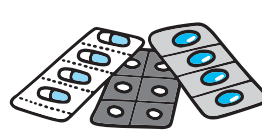
有効成分は先発医薬品と同じですが、子どもや高齢者にものみやすくなるよう製剤上の工夫が施されたものもあります。



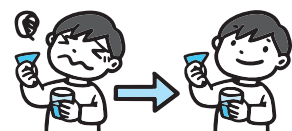
錠剤を小さく



錠剤をゼリー状や液状に



のみ間違いを防ぐデザイン



味やおいを改良